

## ●初井しづ枝

チャプリンがステッキ振り来類型は淋し淋しサンドウ  
イチマン  
『藍の紋』

溪流のたぎちに低く迫り咲く赤き椿は水に散るべし

『冬至梅』

一首目は一九五六年、作者が五十五歳の時に刊行した第二歌集に収められている。自己の内面を見つめる作品が多かった作者が詠む対象を広げていた頃の作品で、珍しく世俗を題材としている。街角で見かけたサンドウイチマンのステッキを振りながらやって来る姿は喜劇王・チャプリンを思わせた。ところが、それは本物ではなく、あくまでも「類型」だとして「淋し」を繰り返す。妥協なく独自の歌世界を希求し続けた作者らしい、きつぱりとした詠みぶりである。

二首目が収められているのは一九七〇年刊の第四歌集。溪流の水が激しく流れる所で目にした椿の様子が生き生きと伝わり、流れの勢いと「低く迫り咲く」椿の力強さが絶妙に呼応している。椿の色をあえて強調し、視覚的な効果を高める「赤き」は白秋門下らしい表現である。上句が丁寧かつ繊細に描写されているのに対し、下句の「水に散るべし」には作者の美意識が直接的に込められている。

（薄葉 茂）

## ●野村 清

低声にデアポロ唄ひながらゆくわれは微酔<sup>ほろよび</sup>春の夜の月  
『皐月號』

棺桶に片足入れし老なれど片足でできることはしませ  
う  
『老年』

楽しく呑んだ帰り道に「デアアポロの歌」（作曲オーベル、訳詞堀内敬三）を小さく口ずさむ。伊達男のダンディズムを描いた歌詞と8分の6拍子の勇ましく陽気なメロディーに次第に気分が高まり、デアポロ！デアポロ！デアポロ！低声ながら自然と上向きになって目に映るのは春の月。われは微酔、の宣言口調はアルコールの効果の心地よいあらわれか。一人の紳士のしぐさに、モダンズムあふれる街並みまでもが浮かぶようだ。

二首目、上の句の決まり文句が下の句で大きく発想を転換する。人生の最期の力で綺麗に身仕舞しようという読者への呼びかけ及び自らへの言い聞かせは、儂い老人の消え入るような話し言葉ながら飄々とした表情もあり、葛飾北斎のいたずら描きなども連想させる。この片足はなかなか器用な動きをしそうだ。意外とできることは多い。老境の知恵と技と洒落っ気を持っている足なのである。

（白川ユウコ）

● 鈴木英夫

くるめくはカンナの紅あけが日盛りの庭にゆゑあらず異象を怖る  
『おりえんたりか』

はたらきてはたらきて炎天につくばひし農のおろかを  
叱りつつ看取みとる  
『寂寥の苔』

一首目は第一歌集の巻頭歌。「昭和九年夏・水戸市郊外磯濱に在り。こころ熄みがたくて」の詞書きが付く。時に作者は二十二歳、千葉医科大学の三年生。この若き旅人の心を捉えたのは眼前の海ではなく、鄙びた漁村に咲くカンナだった。カーンと照りつける真夏の太陽、その陽を浴びるカンナの紅、何でもないこの景に作者は揺すぶられる。己の魂と響き合う得体の知れないエナジーを彼は見たのだろうか、あるいは、青年ならではの感傷だろうか。すでに白秋に師事していた作者の出発に相応う浪漫的一首である。

二首目は第五歌集所収の仕事の歌。治療するのは医師の当然の務めだが、働き詰めの、その愚かさを諫める所に作者のスタンスがある。また、あえて二句を破調にする上の句の丁寧な描写に農民への敬意が滲む。患者に寄り添う優しく温かいまなざしは、医師としてのみならず、鈴木英夫の人間性そのものなのであろう。  
(金子智佐代)

● 田谷 鋭

昏れどきの人らかへりみぬ店先に洗濯機はゆたかなる水を揉む  
『乳鏡』

青草にこもり燃えゐるほむら一つ夢の続きの如しあしたを  
『水晶の座』

田谷の作品には、目の前の対象に触発されて動いた心が一首に結実している実感がある。一首目、道ゆく誰もが「かへりみぬ」洗濯機を作者は目に留め、「ゆたかなる水を揉む」という本質を捉える。「ゆたかなる水」の語には、事実と感動とが分かちがたく結びついている。身近に過ぎて気づきにくい世界の豊かさが、田谷の作品には満ちているのだ。そういえば近ごろは、洗濯機が屋外に置かれているのを目にすることも、ずいぶん減ってしまった。

二首目も感動の源泉は明らかだ。しかしこの歌の景である青草には、「ほむら」「夢の続き」が幻視される。「ほむら」のイメージの鮮やかさもさることながら、「こもり」がよい。実景である青草の裏には、さらに豊かな感情がひしめいている。それらは作者自身の感情であり、他者や世界が抱く感情でもあるのだらう。作者の透徹したまなざしが感じられる、円熟した印象の一首だ。  
(三沢 左右)

●宮 英子

木犀の香にいぎなはれ遊歩道ひと木の立てば夫のまほろし  
 『花まゐらせむ』

眠られず眠らな眠れ夜と朝の幕間アントラクトのながきただよひ  
 『幕間—アントラクト』

一首目。金木犀のかおりに誘われて遊歩道に出てみると、そこには一本の木が亡き夫のおもかけを宿して立っていた。「ゆうはどう」という浮遊感のあるやわかい響きが、歌全体の幻想的な雰囲気合致している。内容は切ないが、リズムのなめらかさのおかげか、悲愴な挽歌にはならず、むしろ愛する人に再会できたことへのよろこびが伝わってくる。

二首目は、まず上の句のリズムを味わいたい。眠れない夜、作者は早く眠りたいと思い、ついにはみずから呼びかける。しかし実のところこの作者は、不眠の現状をただ苦しむだけではなく、むしろその「ながきただよひ」の時間を受け入れ、どこか遠観した気持ちで楽しんでるように見える。「アントラクト」というルビは、その思いの表れではないだろうか。朝と夜に起るドラマ自体ではなく、その合間にあるたゆましい時間を、このようにおしゅれに詠むことができる。大人の余裕を感じる一首だ。  
 (岩崎 佑太)

●葛原 繁

窓際におにお圧されて列車にかよふ朝楽観せず悲観せずわれ五十歳  
 『又玄』

行く風の息のまにまに吹雪く花あるものは高く吹かれつつ舞ふ  
 『鼓動』

一首目、満員の列車で仕事へ向かっている場面を詠んでいる。「窓際におにお圧されて」から、列車の混み具合が伝わる。毎日同じ時間に同じように混んだ列車に乗って同じ場所へ通う。そんな日々を倦むのではなく、楽観も悲観もしない淡々とした態度をとっているところに、微かなユーモアと人生の哲学を感じる。「押されて」ではなく「圧おされて」に、朝の混雑のすさまじさに加え、仕事での重責も窺える。結句の「五十歳」が効いている。若くもなく、まだ老いてもおらず、仕事でも大きな責任を担う年代の苦悩が漂う。

二首目は一瞬の自然の姿を描写した歌。「あるものは高く吹かれつつ舞ふ」と一部の花だけを見せ、そこに描かれていない他の花まで読み手に想像させる。風と花の動きの方向にも注目した。「行く風」は横方向の動き、「高く吹かれ」る花は縦方向の動きを連想する。一首の中に方向の違う動きがあることで景に広がりとおもしろさが生まれる。  
 (斎藤 美衣)

●三木アヤ

遊ぶがに街ゆきて買ふ秋の日のベレーを留めむ木の帽子ピン  
『地底の泉』

わが夫がわれに与へし一のもの朴念仁の大き安らぎ

『夢七夜』

一首目、ある秋の日、作者は目的もなく街に出た。何か買いたいのがあったわけではない。ちよつとおしゃれして、ウインドウショッピングを楽しんだ。ふと木製の帽子ピンに目が止まる。高額ではないし、重いものでもない。手軽な買物だ。帽子ピンが冷たい金属ではなく木製であることが、秋の乾いた清々しい季節感によくなじむ。

二首目、ふつう「朴念仁」は誉め言葉ではない。言葉少なくて無愛想な人、人情や物の道理のわからない者など、あまり好ましくない意味がある。長年、夫婦生活をしながら、どうもトーンが合わないと思うこともあったろう。作者は心理学者、カウンセラーのカウンセリングをするスーパーバイザーとしても知られた人だ。複雑で繊細な人間心理に接するなど、神経を使う仕事の日々だったろう。そんな作者にとつて、「朴念仁」の夫は、むしろ大きな安らぎだったのだ。そのことへの感謝がにじむ。

(水辺 あお)

●安立スハル

神は無しと吾は言はねど若し有ると言へばもうそれでおしまひになる  
『この梅生ずべし』

立ち憩ふ輓馬のまなこ覗きみればとてもかなはぬやさしさを待つ  
『安立スハル全歌集』

一首目は宗教に関する現代的なテーマを扱っている。古代社会のように素直に神の存在を信じることは、現代社会ではできないであろう。特に、終戦という大きな価値観の転換を体験した戦後の日本ではそうだ。この歌は一見すれば思弁的でしかも中立的な立場を維持しているようだが、その奥には「この問題については容易に結論を出すことなく、人類は継続して考えていかねばならない」という強い意志が据えられているように思われる。

二首目は一転して客観的な描写から引き出された情緒を扱っている。草食動物が立ちながら休むのは当然だが、「輓馬」という言葉で、厳しい労働が連想され、そのことが人間社会における労働までをも想像させる。その輓馬に対する作者の感慨は「力強さ」ではなく「とてもかなはぬやさしさ」であった。輓馬が描写されているが、歌の内容は人間存在への讃歌であるように思われる。

(才野 洋)

## ●蒲池由之

母の死よりはじまる生もあるべしと犬つれてゆくばつたとぶ道 『水心』

胸割きて閉ぢて睡れば月光のさざなみが寄せてくる寄せてくる 『蒲池由之全歌集』

一首目の歌、母から生まれ、母に育てられ、常に母のいたこれまでの生。母の死はまた母のいない新しい生の始まりでもあると捉える。これから始まる新しい生へ一筋の道を犬を連れて歩く作者が浮かんでくる。これからの生はどんなふう<sup>に</sup>展開していくのだろう。結句の「ばつたとぶ道」が何かを暗示しているようで、更に心に残る歌となっている。

二首目の歌はその歌の続きの一連に「咳すればしやしきしやきといふ音まじる気管の先に肺のなきゆゑ」という一首があり、当時かなり深刻な病状にあったことが窺える。そしてその後にも近づく死との壮絶な闘いの歌や、諦観し冷徹に自己を詠んだ歌が並んでいる。そんな重い背景を理解した上で、改めてこの一首を読み返してみると何とも言えぬ辛さや切なさ<sup>が</sup>ひしひしと伝わってきて胸が苦しくなる。殊に結句の「寄せてくる寄せてくる」のリフレインが恐ろしいまでの静けさ<sup>に</sup>淋しさ<sup>と</sup>悲しさを増幅させていくようだ。(海老原光子)

## ●杜沢光一郎

疾風はやての季節ふたたびわれにめぐりきてともすれば空洞の如きからだだよ 『青の時代』

皺みたるまぶたを持てりこの犀はいかなる善人のなれのはてなる 『爛熟都市』

一首目、春先に吹く疾風。疾風が吹くその季節がまた自分に訪れたと詠う。「ふたたびわれにめぐりきて」ということばによって、この季節に心を留めてから何度も同じような感覚を味わっていることを印象づけている。実際、風は身体を通過しないが、その速さや冷たさなどが、自身の身体をいつもと違うものに感じさせたのかもしれない。内部がうつろな空の器としての身体を意識させられる歌である。

二首目は、陸上で象に次いで大きな身体を持つ犀の歌。立派な角を持ち、厚くて硬い皮膚に覆われた身体は、さながら鎧を着ているかのように敵強い。それでも犀の眼は、その体軀はらに似合わずつぶらである。皺しわの臉が眼の半分程を覆い、眠そういで穏やかなその眼を見ると、まるで善人が行き着いた「なれのはて」が犀であったのかも、という作者の連想に納得する。一体どんな善人であれば、最期を犀として生きられるだろうか。作者の鋭い観察眼を感じる。(椎名 恵理)

●岡崎康行

仁王像にもつとも厳しく対きあひてつひに泣きたる二  
歳児抱く  
『コスモスの歌』(歌集未収録)

学びぬ生徒ありたる空間をたたへていまだ椅子と机  
あり  
『水の瘤』

一首目は、山門で睨みをきかせる仁王像に、ただ純粹に向  
き合っている二歳児の姿を詠んでいる。自分の感性のみで仁  
王像と対峙する様子は、知識で鑑った大人より「もつとも厳  
しく」向き合っていると言える。しかし仁王像の気迫を受け  
止めきれず、ついに泣き出す二歳児。その様子をじつと見て  
いた父親の存在が、結句で浮かび上がってくる。二歳児を描  
いているようでいて、同時に子供の自我を尊重し、後ろから  
しっかりと見守る父親の姿が印象的に描かれている。

二首目は、椅子と机があるだけのがらんとした教室を詠ん  
でいる。しかしそこは生徒たちが生き生きと過ごした空間で  
あり、生徒はいなくなっても椅子や机はそのことを覚えてい  
るようだ。活気ある生徒の姿がイメージされることで、逆に  
空き教室の寂しさがいっそう感じられる。しかも読者と共に  
空き教室自体も、そして椅子と机もそれを感じているような、  
不思議な感覚を覚える一首である。

(山田 恵里)

●柏崎驍二

雪のふる昼のさびしさ左目が右目に寄れるかれび鯨をまへに  
『青北』

くりの木はやはり栗の木くりの木を栗の樹と書けば立  
派にすぎる  
『月白』

一首目、柏崎驍二とは切り離せない雪の歌。昼とあるので  
昼食の鯨なのか。前にした鯨の目をややユーモラスに歌う。  
鯨と鯨の違いや左右の目はどうだったかなど、さびしさとは  
無縁な連想が過るが、逆に謎めいたさびしさが後からじんわ  
りと際立ってくる。二句切れで倒置。昼に降る雪の明るさと  
静けさが先にあることも効果的だ。鯨の生息していた海の底  
と、降る雪の到着点つまり空の底とがリンクする。底にとど  
まるしか無いさびしさを鯨に見たのであろうか。

二首目、くりの木、栗の木、栗の樹と表記違いで四度繰り  
返される。軽い二句切れ。くりと栗は同じだが木を樹と書く  
と立派すぎるといふ。音での理解は切り捨てて文字の力で潔  
く詠まれている。山で出会うくりの木と、栽培されている栗  
の樹の違いか。作者のこだわりとくりの木への素朴な親しみ  
が伝わってくる。立派でないくりの木の方を好ましく詠う姿  
が生き様のようで心地よい。

(中村 敬子)